

令和八年度入学者選抜 一般選抜 試験問題

試験科目 国語

〔受験上の注意〕

- 一 用紙は、すべて試験開始の合図があるまで開かないこと。
- 二 試験開始後、ただちに次のことについて、よく確かめること。
 - ア、乱丁、落丁のある場合は、試験開始後速やかに手を挙げ、監督者に知らせること。
 - イ、問題用紙は、全部で十一ページである。
 - ウ、解答用紙は、外国語学部が一枚、日本文化学部・教育福祉学部が三枚である。
日本文化学部・教育福祉学部の解答用紙に含まれている白紙は、メモ又は下書に利用してよい。この白紙は、持ち帰ること。
 - 三 解答用紙の氏名欄・受験番号欄は必ず記入すること。
 - 四 解答は、所定の欄内に楷書ではっきりと記入し、欄外には記入しないこと。
 - 五 問題用紙の余白は、メモ又は下書に利用してよい。
 - 六 問題用紙は、持ち帰ること。

外国語学部の受験者は一のみを解答すること。

日本文化学部・教育福祉学部の受験者はすべて解答すること。

試験開始	12:30
試験終了	外国語学部 13:30
	日本文化学部 教育福祉学部 14:00

— 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、文章は問題文とすににあたって、原文を一部改めたところがある。

森岡は人間が自らを家畜化する社会の姿を、「無痛文明」と呼ぶ。できるだけ苦痛を避けるのはもちろんのこと、苦痛があるかもしれないことを予防し、そうすることで無痛化する。そして、もしも苦痛があったとしても、みずから置かれた状況から眼をそらし、なかつたことにして生きることを多くの人々が選び取っているような社会の姿だ。森岡の無痛文明論は、政治学者の藤田省三が一九八五年に論じていたことと重なる。藤田は、不快の源となりうるものを根源的に一斉除去して、不快の欠如態としての社会に生きることを「安楽」とみなす現代社会の風潮を捉え、こうした社会を求める心性を、「安楽」を求める全体主義と表現した。

森岡や藤田らの指摘は、社会が生命を資源化し続け、なおかつインフラ化^①している現在においてより重みを増している。スーパーに並ぶ切り身になった魚や美しい断面の肉はもちろん、美容に使われるプラセンタ（植物の胎座からウマ、ブタ、そしてヒトの胎盤まで）、医療用のiPS細胞や臓器、食品や工業製品の材料となる細胞や微生物培養など、多様で多数の生命は私たちが用いる資源となつて加工され、商品として社会に流通し、こうした生命を再生産し続ける仕組みは私たちの日常生活を支える下部構造になつている。上下水道というかたちで下部構造になつた水がそうであるように、こうしてインフラ化したものたちは、私たちの日常の関心やまなざしの外におかれる。新しく造られるか、故障や破損など何か不具合があるか、あるいは撤去されるか、そうしたときには関心も集まり、そこにそのようなものがあると見えるようになる。そうでないときには、見えないことが正解になるのがインフラだ。問題がないようメンテナンスされ、常に不可視化され続ける。キャットフードが提供され続ける限り、スーパーの棚に卵や肉が並び続ける限り、それを支えるインフラ化した多数の生命に（あるいはそれらが生命であることにも）関心は向けられない。「安楽」であるためには、知れば苦痛を感じるだろうから、予防的に無関心であることが合理的^②だからだ。

「安楽」を求める全体主義は、リスクが中心になつた社会と互いに支え合っている。私たちは、不可視化されたインフラをわざ

わざ見いだすより、もつと別のところに気を回し、関心をもつことに忙しい。私たちの日常は、選択の自由と市場での競争のなかにある。ゆえに、人生をまわすためのリスクを積極的に管理できる人間として、

をもつことを求められる。プレイヤーとしてどこまでも主体的に、絶え間なく自分の能力と成果を証明し続ける社会において、その資源となる私たちの身体、心、生命を支える食は数多くの意味と役割をもつ場となる。食は、どこまでも個人的な行為でありながら、何よりも雄弁な、社会に向けた政治と表象の場でもあるから、誰とも共有しなくてよい束の間の自由を自分のために謳歌できる場でありながら、他者に向けて自律的で差異ある「私」をつくりあげ表現する場となる。

そのような現代社会において「自炊」とは、食がもつ多様な意味と役割を主体的に統制すること、セルフハンドリング (self-handling) であつて、自分で料理すること (self-cooking) ではない。素材を育て、時間をかけて出汁を引く丁寧な食事。忙しく働く日々、最も効率よく栄養をとりつつ味覚も充たす中食や惣菜を利用する食事。プロテインとビタミン補助食品でバランスをとる食事。それぞれの価値やその時々に変化するニーズや欲望によりかたちは変わつても、中心にあるのは、いかにセルフハンドリングしているか／できているか、ということだ。選択を迫る消費主義社会や、市場での競争に積極的に参与すべくリスクを管理するのか、あるいはそうしたものから離脱したところに価値をおき人生を立てようとするのか、いずれの立場であれ、どのように食をセルフハンドリングするかが「私らしさ」を表現する場となり、他者へ向けて自分を政治的に表象することとなる。

私たちは、自分という存在が、日常的に降りてくるさまざまなイデオロギー（よく働き税を納める人間であれ、主体的に生きよ、個性豊かな人間であれ、ジェンダー二分法の中におさまっておけ……）のなかに埋め込まれ、私たちに気づかせないまま選択を構造化し限られたものに行っているシステムのなかでしか生きられない。それゆえに所有されること、依存することのあいだで自分の裁量をどうにか増やすことを、自由と読み替えて生きているのだと知っている。そして、自分の裁量を増やそうと、終わりなき主体化を続けるほかないことも直観的に知っている。その矛盾を引き受けつつ、「私」であることが自由であることと同義であることを信じ、そうあることを希望して自炊する。

だからこそ、自炊の極地は、狩猟採集で材料を手に入れて丁寧に加工し、調味料も含めて自分でつくりながら料理を作ることではない。自由の拡大を確信できるよう、自己とその周辺の因果を完全に統制することだ。そして、自炊の反語は、加工食品を食べることも、お手伝いさんに食事の支度をアウトソーシングすることも、栄養バーを食べてすます合理的な食をすることもない。食をセルフハンドリングすることから、もつといえは人生のセルフハンドリングのための場になることから離脱することだ。他方で、セルフハンドリングからの離脱は、自分のケアをしないことにもつながる厄介さをもつ。どこまでも主体たれというシステムに抗い、その歪みを引き受けようとするれば、自己のケアの放棄につながってしまう危険性をもつのだ。

昨今の食を題材にした作品には、食がセルフハンドリングの場であることに疲れた人びとの姿が見える。施川ユウキのマンガ『鬱』はアンチグルメマンガと呼ばれる。就職浪人生の鬱野たけしの独白に表れるのは、自己ケアの放棄はできない、かといってセルフハンドリングのための場や仕掛け、セルフハンドリングを楽しめる他者の充実が見える場である食を、みずからの生の充実の場には(今のところ)できない、という疲弊だ。まるよのかもめのマンガ『ドカ食いダイスキ!もちつきさん』では、逆に、自己統治を一時的に放棄するセルフハンドリングの姿、すなわち、気絶するまで暴食する様子が自由で自己満足する食の姿として描かれる。それは、健康であれというイデオロギーから撤退し、好きなものを好きなだけ食べるといふ欲望を解放することで自由を得る姿でもある。

私たちが最も警戒しなければならないのは、こうした抗いもすべて「テイストの差」といふ欲望と消費の差異に薄つべらく吸収する、「安楽」の全体主義の所在であり、無痛文明となった社会の姿ではないだろうか。

「安楽」な全体主義や、無痛文明社会のなかで生き抜くハンドリングの場ではなく、それらから抜け出す営みの場に自炊がなることは可能だろうか。

(中略)

床に転がり、スイッチをオフにする。とたんにあなたは身体という他者に出会うことになる。耳元をザーザーと血液が流れる音がする。おなかぐるぐるとうごめく。腸内の細菌たちが活動している。呼吸をする。空気を食べなければ私たちは生きられ

ないが、その空気の組成は人間では生み出せないから、植物や藻類の手を借りるほかない。喉が渇く。水もまたしかり、分子が着いたり離れたり、その化学的活動の恩恵にあずかるほかない。何を食べようか。試しに身体に聞いてみる。しばらくはいい。身体はそういうかもしれない。SNSやらなにやら、私が「私」をつくるためのものをオフにする。当たり前前の常識になっている労働社会の理もオフにする。身体という他者との対話から、私の生活(生きるということ)を養うはたちあがつていく。その先に、空気があり、水があり、身体がほしいといった食べものがあり、それらをつくっている他者たちとのつながりが、ゆっくりと天井の先にある関係性として身体を基点に広がっていく。インフラ化して私たちの社会に沈む多数の生命たちがその先にいる。何かを食べることは、その他者たちごと、あなたの身体に暮らす他者とそのエネルギーを分け合い、生きている場をつくっていくことだ。私たちは最初から世界に開かれているのであって、身体は閉ざされていない。もともと開きっぱなしなのだ。

どうやって「私」をつくるか。ゆっくり身体という他者との「私」の共有から始めること^④で、私たちはセルフハンドリングにおさまらない「自炊」にたどりつく。オフにしていたスイッチをどうやって入れるのか。そのためにどう食べることを再び始めるのか。

「自炊」とはおそらく、そうやって問いかけること、それ自体の営みを指すだろう。

(福永真弓「自炊と自己家畜化」『ユリイカ』二〇二五年三月より)

(注)

森岡…森岡正博。日本の哲学者。

中食…調理済みの食材を買って持ち帰り、職場や家庭などで食べること。

問一 傍線部①②③の漢字をひらがなに改めよ。

問二 傍線部①について、「インフラ」の説明となっている表現を本文中より一六字で抜き出せ。

問三 傍線部②について、三〇字以内でその理由を具体的に説明せよ。

問四 空欄には「外部から独立して影響を受けない」という意味の言葉が入る。本文より二字で抜き出せ。

問五 傍線部③について、ここでいう「セルフハンドリング」とはどのようなことか、五〇字以内で説明せよ。

問六 傍線部④について、文章全体を踏まえ八〇字以内で説明せよ。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え よ 。 な お 、 文 章 は 問 題 文 と す る に あ た っ て 、 原 文 を 一 部 改 め た と こ ろ が あ る 。

元三は歳のはじめ、月のはじめ、日のはじめとて、一天四海の人々の、かしこきも愚かなるも、愁ひあるも愁ひなきも、貴きもいやしきも、いはひかざること、かはる事なしとみゆ。…(中略)…昨日の夜半過ぐるまで、人の門たたきて、何事にかあらん、^④ことごとしく足を空にまどふが、ただ一夜^⑧あけぬれば、ひきかへ、心もゆるゆると、又とも晦日の来るべき心もなくて、野辺の小松に千代万世をいはひそめ、いつ死ぬべきものとはなしに、万のことをいみおそれ、^①朝の露に名利をむさぼり、^②夕の陽に子孫を愛し、蟻が磨^もをめぐるがごとく、おなじことをぐるりくると、五百八十年七まがりといはひて、世を秋風の心は露ちりほどもなき人心を、一休おかしくおほしめし、^⑥「誠におろかなるかな。權^{あまがけ}の晷^{ひかげ}まつ間をもさかり久しき花とながめ、かげろふの青天に羽をふるひて、たのしむ間もなき世の中に、糞に箔塗る正月ことばや。ただ時の間の煙ともなりなむと、^③打ち見るよりに思はるる。いで物見せん人々よ」と、墓原へゆきて、しやれかうべをひろひ来り、竹のさきにつらぬきて、^⑤比は正月元日の早天に、洛中の家々の門の口へ、によこによこと^か彼しやれかうべをさし出だし、「御用心御用心」とてありき給ふ。皆人いまはしくて門さしこめて居けるより、今に正月三日は門戸を鎖^{かぎ}しけるなり。

しかれば一休を見まいらせて、或る人のいへるは、「御用心とは尤も至極なり。いはひてもかざりても、終には皆人かくのごとし。されども世の習ひにて、かくいはひよるごぶに、そのむくつけなきしやれかうべを、家々へ出ださることは、御ちがいならずや」と申しければ、「さればよ、われもいはひて此しやれかうべをおのおのに見するなり。めでたしといふこと、いかが心得けるぞや。むかし天照おほんがみ、岩戸をひらきたまひしより、^⑦ことおこるといへども、此しやれかうべよりほかに、めでたきものはなし」とて詠める、

^④にくげなき此しやれかうべあなかしこ目出度^{めでたく}かしくこれよりはなし

と侍り給ひて、「是見^{これ}よや人々、目出たるあなのみ残りしをば、めでたしといふなるぞ。皆人^{みな}ごとにかくとは^②はしるらめど、きのふも過ぎし心ならひにけふをくらしつ、^⑤あすか川の淵瀬常ならぬ世とは目に見ぬからに、^⑥風の音にもおどろかぬ人々に用心せよ

とおもふなり。ただ人は是にならねば、目出度事めでたきはなにもなし」とのたまへば、諸人これを聞きて、「さてもかしこきひじり」とて、おがまぬ人はなかりけり。

（「一休ばなし」より）

（注）

元三：正月一日。

小松：小松引き。中古、正月初めの子なの日に野山で根長の小松を引き抜いて長寿を祝った行事。

五百八十年七まがり：五百八十年と、干支の七回り四百二十年。合わせて千年の意で、長寿を祝う言葉。

糞ふんに箔塗はくぬりる：くだらない物のうわべを飾り立てる。

しやれかうべ：風雨にさらされて肉の落ちた頭骨。

むくつけなし：「むくつけし」に同じ。

問一 傍線部①、②、③の本文に即した意味を記せ。

問二 傍線部④、⑤、⑥を例にならって文法的に説明せよ。

例 マ行上一段活用動詞「みる」未然形＋打消の助動詞「ず」連用形

サ行変格活用動詞「せいす」連用形＋謙讓の補助動詞「きこゆ」終止形

問三 傍線部⑦、⑧はどのようなことか、記せ。

問四 傍線部⑨について、主語を補って現代語訳せよ。

問五 傍線部⑩について、二つの掛詞に注意して現代語訳せよ。

問六 傍線部⑪は、『古今和歌集』の和歌「昨日といひ今日と暮らしてあすか河流れてはやき月日なりけり」「世の中はなにか常なるあすか河昨日の淵ぞ今日は瀬になる」と、『徒然草』の「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば」を踏まえている。この点に注意して、意味を説明せよ。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた部分がある。

姚元崇開元初為中書令。有善相者來見。元崇令密於朝堂

目諸官後當為宰輔者。見裴光庭白之。時光庭為武官。姚公

命至宅与語。復使相者於堂中垂簾重審焉。光庭既去。相者

曰、「定矣。」姚公曰、「宰相者所以佐天成化。非其人。莫可居

之。向者与裴君言。非応務之士。詞学又寡。寧有其禄乎。」相者

曰、「公之所云者才也。僕之所述者命也。才与命固不同焉。」姚

默然不信。後裴公果為宰相数年。及在廟堂。亦称名相。

〔太平広記〕より

(注)

姚元崇^{よげんすう}…姚崇の最初の名。姚崇は玄宗の宰相。後の「姚公」「公」も同じ。

開元…唐の玄宗皇帝の年号。

中書令…中書省の長官。

善相者…人相見。後の「相者」も同じ。

朝堂…官吏が政務に携わる場所。

宰輔…宰相に同じ。

裴光庭^{はいこうてい}…人名。後の「裴公」も同じ。

垂簾…ここでは垂らされたすだれの内側のこと。

所以佐天成化…「天の運行を助けて人民の教化を行うためのもの」の意。宰相は立派な政治をすることを通じて、これらを

行うものだと考えられていた。

応務之士…仕事をてきばきとこなす人物。

詞学…詩文を作る能力。

其祿…宰相の俸祿。ここでは宰相の地位も意味する。

廟堂…天下の政治をつかさどる場所。

名相…名宰相。

問一 傍線部A①B②C③の読みを送り仮名も含めてひらがなで記せ。

問二 傍線部①について、誰が誰にどのようなことを言ったのか明確に記せ。

問三 傍線部②のようなことを「姚公」がした理由を述べよ。

問四 傍線部③を書き下し文にせよ。

問五 傍線部④と同じ意味を持つ二字の熟語を記せ。

問六 姚元崇と人相見が意見を異にした理由について、六〇字以内で説明せよ。